

2019年5月31日(金)

老球の細道484号

5月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

年号が変わり史上最長のゴールデンウィークと騒がれた月であったが、毎日が日曜日、毎日が大晦日、毎日がお正月の私には何ら影響もなく、いつもと同じ新緑の季節を過ごすことができた。息子家族は北陸旅行(恐竜博物館等見学)、鬼妻はおばちゃん達と「ミステリーツアー」と称する日帰りバス旅行。弟夫婦が真っ赤な新車で久しぶりの帰省旅行。周囲が「デイスカバージャパン」する折、私は1人寂しく「ローン・レン爺」の日々。

今月のトピックは孫娘の「バレエ教室」を参観したこと。親の補欠で行ったが、周囲は若いお母さんばかりで緊張の時間だった。孫娘の雄姿に思わず「爺さまバカ」の涙。

1・テレビから

◆「Never too late. Never give up. 努力はかなうものではなく報われるもの」〈BS朝日『鉄道絶景の旅』・田中雅美〉

元水泳五輪代表選手の座右の銘。「今からでも遅くはない」は栃木ブレックスの田臥勇太の著書名にもある。「決してあきらめるな」は尊敬する葵高校元校長花井先生の校長講話の決め台詞だった。努力はかなわなくても、そのプロセスが色々な意味で報われる。

◆「“比較三原則”はダメ！」〈NHK放送大学『最後の講義』みうらじゅん〉

日本の核兵器に対する基本原則「非核三原則」はよく耳にしていたが、子どもの教育における「比較三原則」は初めて聞いた。「①他人②親③過去の自分」。子どもは比べられるのを極端に嫌がる。

2・読書から

◆「タイムカードにしばられるのではなく、患者にしばられる医師になってほしい」〈本宿尚著『松明』文芸春秋〉：今は亡き元福島県バスケットボール協会長の著書から。本宿先生は国見町にある「公立藤田総合病院」を日本でも有名な地域医療機関に育て上げた。先生はまた、松井先生の医師、そしてバスケットボールの師匠でもある。優しい笑顔と鋭い眼光を両方持っていた。働き方改革もあるが、教員もコーチもこうありがたいものである。

3・新聞、雑誌のコラム等から

◆「“壊れるかもしれない” “壊れそうだ” というのを、壊さないように大事に存在させたい」〈朝日・折々のことば・森英恵〉：ファッションデザイナーはグラスや花瓶など「壊れてしまえばおしまい」というはかなさにひかれるという。当たり前前に続く日常生活もそのような愛おしさをもって向き合うことの大切さを教えられる。血圧と腰痛も同じ。

◆「夢という言葉は使わないんですよ。だって、かなわないし、覚めるから。あえて目標と言うんです。目標は、そこを目指せるから」〈朝日・プロ野球巨人軍・上原浩治引退〉

俺流で言うと「“夢”は追いかけるもので寝ても覚めてもみているもの。“理想”は憧れ近づくもの。“目標”は決意をして必ず成し遂げるもの」となるが、現実には厳しい。

◆「ケ・セラ・セラ、なるようになる」〈米国映画『知りすぎた男』主題歌・ドリス・デイ〉：97歳で亡くなった元ハリウッド女優の有名な曲である。人生はなるようにしかならない。明快で楽天的な哲学を広めることに貢献したという。今は昔、物事に行き詰った時は「ケ・セラ・セラ」とビールを飲みながら映画をよく観た。なぜかなんとかなった。